OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	“she eat” : 藤井治彦先生を思い出しながら
Author(s)	川島, 伸博
Citation	Osaka Literary Review. 2019, 57, p. 95-103
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71981
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

“she eat”
—— 藤井治彦先生を思い出しながら ——[1]

川島　伸博

僕が大学院を受験したのは 1995 年のことである。恐ろしいことに、その合否発表前日が、卒業論文の口頭試問だった。藤井治彦先生とまともにお話したのはこのときが初めてである。スペルチェッカーもない時代、僕が初めて英語で書いた論文はひどい出来だった。「君、この Platon ってのは誰のことかね？」と先生から真顔で問われ、質問の意図さえわからぬままうろたえていると、「Plato のことじゃないの」と言われ愕然としているところに、「困るんだよね、大学院進学を希望する人がこんな初歩的な間違いをするようじゃ」と、えげつない追い打ちがきた。

幸い、この愚かな誤ちにもかかわらず、僕は進学を許され、その年の 4 月から金曜 2 限開講の藤井先生の院演に参加することになる。テキストは John Milton の *Paradise Lost*（『楽園喪失』）だった。ただし、この演習はすでに何年も続いた後で、[2] 僕が参加したときには、第 10 巻の途中、人類を堕落させた Satan が、意気揚々と地獄へ凱旋する場面まで進んでいた。藤井先生は、この年から初めて参加する僕らに向かい、「君たちは堕落後からです」と笑いながらおっしゃった。

この演習ではすぐに prelapsarian / postlapsarian という二項対立を教わることになるのだが、この言葉の語源にあるラテン語の lapsus は「落ちること」、「滑ること」、「ずれること」を意味する。阪神大震災という未曽有の lapsus が生じた 1995 年、卒論で初歩的な lapse of the tongue をした学生が、Adam と Eve とが重大な lapsus をおかした後の『楽園喪失』演習に紛れ込んでくる。しかもその学生は、後に生意気にも Milton を研究

対象とすることになる。藤井先生にとって、僕はいろいろな意味で postlapsarian な存在だったと言えるかもしれない。

先生が逝かれて 20 年、先生の生前と没後をそれぞれ prelapsarian / postlapsarian とし、前者を楽園・理想化することはたやすい。しかし、Ben Jonson の詩を講じながら、この詩人の殺人事件に触れつつ、「君たちにも殺したいほど憎い存在が一人ぐらいいるだろう」と僕らに問いかけ、「私には二人はいる」とおっしゃり不気味な笑みを浮かべていた先生は、楽園にはおさまりきれない。先生の最後にしてもっとも不肖な弟子である僕に与えられた仕事は、あえて lapsarian な回想となることを辞さず、その lapses（ズレ）の中に、先生の姿を浮かび上がらせることである。

Animal Farm（『動物農場』）の出版によって一躍有名となった George Orwell は、その翌年の 1946 年、“Why I Write”という文章の執筆を依頼され、その中で、なかば得意げに、自分のイートン校時代を振り返っている。

> When I was about sixteen I suddenly discovered the joy of mere words, i. e. the sounds and associations of words. The lines from *Paradise Lost*―
>
> So hee with difficulty and labour hard
> Moved on: with difficulty and labour hee.
>
> which do not now seem to me so very wonderful, sent shivers down my backbone; and spelling “hee” for “he” was an added pleasure. [3]

ここで Orwell が *Paradise Lost* から引用するのは、混沌界を苦労して進む Satan の描写である。この一節は、Milton の影響が反体制作家[4] の文字通り“backbone”にまで及んでいたことを示すものとして、Milton 研究者

の間でよく引き合いにだされるものである。

しかし、事実はそう単純ではない。Bernard Crick[5] によると、確かに Orwell はイートン校時代、Andrew Gow 教授の課外授業で *Paradise Lost* を読んでいる。ただし、その授業で Orwell が使用していたテキスト[6] には以下のような書き込みが残っているのだ。

E. A. Blair King's Scholar
Bought this Book
Much against his will
For the study
Of Milton
A poet
For whom
He had
No love;
But
He was
Compelled to study
Him or abandon
English Extra Studies
Which not being
Commendable to him
He was compelled to
Squander three and six pence
On this nasty little book.[7]

そもそも、Orwell にとって Milton は、「嫌々ながら勉強させられた」

詩人だったのである。この短い文章の中で“Compelled”という言葉が二度繰り返されているのが痛々しい。それでは、“Why I Write”で引用される *Paradise Lost* はどう考えればいいだろうか。

社会主義を標榜した Orwell に、プチブル的少年時代を改悪する傾向があったのはよく知られた話だ。“Why I Write”で行われる *Paradise Lost* からの引用の背後には、自分の社会主義的傾向が少年時代からすでにあったことを示唆する自己演出の意図が見え隠れする。言うまでもなく“labour”という言葉は「苦労」だけでなく、「労働」を意味し、左翼的な響きがある。Orwell は“labour”という語が二度繰り返される詩句を *Paradise Lost* から選び出し、その詩句を読んで衝撃が走ったとすることで、自分の過去を改変し、自分の社会主義的傾向が少年時代からあったことを匂わせているのである。[8]

ただ、Orwell 自身は、この自己演出に少し不安を感じていたのかもしれない。この凡庸な単語がつらなる一節は、“the joy of mere words”（言葉それ自体の喜び）を例証するものとしてはかなり無理がある。当時 *Paradise Lost* のもたらす音の喜びと言えば、T. S. Eliot が指摘したように、異国的響きをもつ荘厳な固有名詞が連なる詩句を例とするのが相場だった。そこで Orwell は慌てて“hee”の綴りにも喜びを感じたと付け加えるのだが、この蛇足によって、Orwell は馬脚をあらわす。Orwell が 16 歳のときに使っていた教科書と同じエディションを確認すると、問題の引用箇所は綴りがモダナイズされ、“he”となっている。つまり、16 歳の Orwell 少年が double e の綴りに喜びを感じたというのは嘘なのである。

Orwell の文章は、回想には嘘が入り込みやすいという事実の代表例とも言えるのだが、好きな詩句として *Paradise Lost* のどの一節を引用するかで、その人のパーソナリティが見えてくること、あるいはそれを操作で

きることを教えてくれる。代表的なところだと、Satan の“Which way I fly is hell: myself am hell” (IV: 75)[9] という台詞は人気が高く、僕などもやはりこの詩行に惹かれるのだが、藤井治彦先生が絶賛していたのは第 9 巻で禁断の実を食べる Eve の描写だった。

So saying, her rash hand in evil hour
Forth reaching to the fruit, she plucked, she ate: (IX: 780-1)

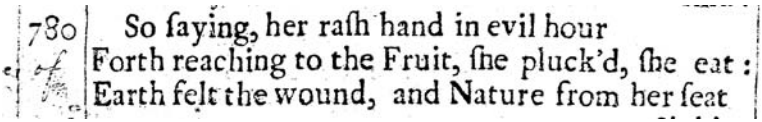
難解な語彙と複雑な構文とを駆使し、長い文章を連ねていくことを専売特許とする Milton の詩句にあって、Eve が罪をおかす、このもっとも重要な局面は、4 つの単音節語が、主語＋動詞という極めて単純な構文に、しかも接続詞の and を使うことなく配置される形で表現されている（“She plucked, she ate”）。それが罪を犯す Eve の性急さ（“her rash hand”）を如実に伝えているのだ、と藤井先生は力説されていた。「Simple を単純と訳す奴ほど単純だ」というのは先生の口癖だったが、この詩句がもつ、深みのある simplicity は藤井先生のお人柄をよく表わしていると思う。

Orwell の文章は、1946 年の執筆時に彼の手元にあった *Paradise Lost* のテキストと高校時代に使用した *Paradise Lost* のテキストの lapsus によって、過去の改変であることを露呈していた。このことは、僕らが読むテキストは確固たるものではなく変化を被ることもあるという、当たり前だが、しばしば忘れさられる事実を思い出させてくれる。このテキストの不安定性、可変性を念頭に、僕らが藤井先生の授業で用いたあの懐かしい教科書を開いてみると、その冒頭には編者 Fowler の言葉がある。これも藤井先生の性格を表わしていると思うが、毎年、院演の最初の授業は、この序文に立ち返り、それを説明するところから始められた。

> In preparing the text I have throughout this volume followed a somewhat unusual plan. I have modernized old spelling, but have reproduced old punctuation with diplomatic faithfulness.[10]

“Diplomatic”という言葉が本来「古文書学の」という意味であることを知ったのはこのときがはじめてだった。また、そのとき先生が、「こういった“diplomatic”な仕事は英米の研究者にまかせておけばいい」とおっしゃったのも印象深く覚えている。そして、僕自身、長い間この先生の言葉を忠実に守り、与えられたテキストを精読することに努力を注いできた。ただし、あの頃と今とでは学問を取り巻く環境にも大きな lapsus が生じてしまった。インターネットの急速な普及、特に Early English Books Online（EEBO）などのデータベースの発達により、日本にいながら、Milton が生きた時代に出版されたテキストを簡単にダウンロードして確認できるようになった。急激にグローバル化した現代にあって、僕らはテキストに対して“diplomatic”であることを避けられなくなってしまったのである。

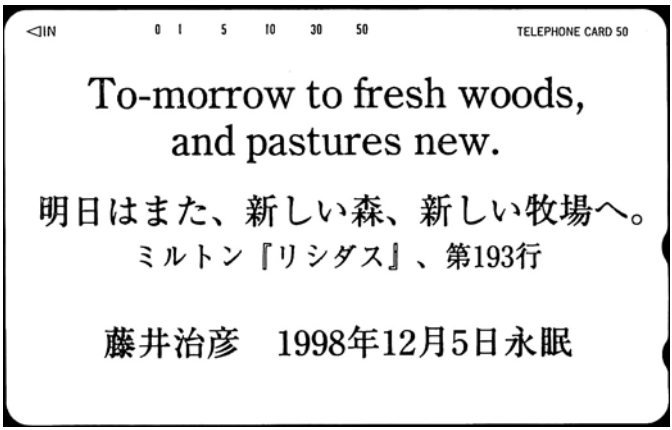
ここで藤井先生が好きだとおっしゃっていた詩句に戻りたい。先の引用は、Fowler がつづりをモダナイズしたテキストから行ったものである。しかしながら、この詩句の本当の凄みは、この近代化されたテキストでは見えにくくなっている。前述の EEBO で 1667 年に出版された *Paradise Lost* の初版をダウンロードして確認してみると、問題の詩句は、以下のようになっている。


780 So ſaying, her raſh hand in evil hour
Forth reaching to the Fruit, ſhe pluck'd, ſhe eat:
Earth felt the wound, and Nature from her ſeat

図版 1　*Paradise Lost* 初版第 9 巻 780-3 行目を拡大したもの

注目すべきは、781 行目の行末である。Milton はここで「食べる」の過去形に ate を用いず、そのヴァリアントである E-A-T の綴りを用いている。[11] この過去形の“eat”は[et]と発音されていた可能性が高いので純粋な脚韻とは言えないかもしれないが、少なくとも次の行末の Seat と綴りの上では重なっている。Blank verse として書かれたこの叙事詩において、脚韻は執拗にまで避けられている。にもかかわらず、Milton はこの大事な局面で、“eat”と“seat”という eye rhyme をここに配置しているのである。[12] この“eat”と“seat”の連なりにも、Eve が犯した lapsus の重大さ、この行為の前と後とに生じたズレの深刻さが表現されているのではないだろうか。[12] 正直、先生の喪失を一番痛感するのは、こういった解釈を思いついたときに他ならない。

Milton の elegy には、友人の死を嘆く詩人が守護天使 Michael に呼びかけ、“Look homeward angel now, and melt with ruth” (Lycidas, 163)とイングランドの惨状に目を向けてほしいと懇願する詩句がある。先生が逝かれてから 20 年、インターネットなどの情報技術革新による恩恵があった反



図版 2　藤井治彦先生のお葬式で配布されたテレフォン・カード

面、日本の教育、研究環境は、もはや lapsus という言葉では言い表せないほど深刻な地滑りが起きてしまった。正直、途方に暮れることも多い。しかし、先生が御存命なら“Look　forward”（前を向け！）と叱咤してくれるような気がする。先生が僕らに残してくれた最後の言葉は、Milton の“Lycidas”の最終行だった。

注

1　本稿は 2017 年 10 月 28 日大阪大学豊中キャンパスで開催された阪大英文学会のシンポジウム「藤井治彦」でパネリストの一人として発表した原稿に基づく。

2　毎回 3 人の学生が担当者となり、それぞれ 30 行を *OED* で意味を確認しながら、しっかり予習して演習に臨むという形式の演習。1 回の授業で 90 行しか進まない精読の授業なので、*Paradise　Lost* を読み終えるのに何年もかかった。この演習でこの叙事詩を最初から最後まで読むことができたのは先生ただ一人だった。

3　*The Complete Works of George Orwell,* XVIII: 317.

4　社会主義革命が成立したとしても、英国には国王が残るだろうと考えていた Orwell を一言で「反体制作家」と定義することには異論があるかもしれない。本論は、*Animal Farm* の序文として書かれた“The Freedom of the Press”などで示される、Orwell の一貫した“orthodoxy”批判の態度、そして“liberty”を追求し続ける態度をもって、彼を「反体制作家」としたい。Orwell の Milton 利用については、龍谷紀要第 38 巻第 2 号（2017 年）所収の拙稿「ミルトンとオーウェルの『動物農場』」を参照されたい（なお、この論考には本論と重複する箇所があることをお断りしておく）。

5　Bernard Crick, *Geroge Orwell: A Life.* London: Secker & Warburg, 1980, p. 64.

6　*The Poetical Works of John Milton.* Ed. W. H. D. Rouse. London: J. M. Dent & Sons, Ltd., 1909. Orwell はこの教科書をイートン卒業後、当時恋していた女性の妹に贈呈している。

7　*The Complete Works of George Orwell,* X: 52. E. A. Blair は Orwell の本名。この書き込みに共感する度合いで、藤井先生との心理的距離が測れるかもしれないが、僕自身、はじめてこの書き込みを読んだときは、快哉を叫んでしまった。しかし、藤井先生ご自身も、生前にこの書き込みの存在を知っていたとしたら、きっと哄笑していたにちがいない。

8　この文章が書かれた 1946 年にイギリスで労働党政権が誕生しているのは興味深い。Orwell はその政権に期待を抱きつつも失望させられることになる。彼の Milton からの引用に“difficulty”という単語も二度使われていることは、Orwell と労働党との歩みが一筋縄ではないことも、示唆されているのかもしれない。

9　Milton の詩句からの引用は、特に断らない限り、すべて Fowler と Carey による Longman の詳注版から行う。

10　Fowler 編集の *Paradise Lost* の Preface, vii.

11　このヴァリアントについては、*OED* にも記載があり、過去形の“eat”の発音として、[et]だけでなく“seat”と韻を踏む発音も挙げている。僕の同期でもある田村幸誠氏は Ammon Shea の『そして、僕は *OED* を読んだ』（三省堂、2010 年）を翻訳し、そのあとがきで藤井先生について次のように述べている。

> その先生は、助手室等で少しお話しさせていただいただけでも、「この人は英語のことなら何でも知っている」とわかるくらい、「英語学者」の風格が漂うすごい先生であった。先生は、治療の際に薬を使うことを非常に嫌がったという。そして、それは、手が麻痺してしまうと OED が引けなくなってしまうというのが理由だったのだと、奥様がお葬式のあいさつでおっしゃっていた。

12　この叙事詩において“seat”という語が鍵言葉となっている点については『藤井治彦先生退官記念論文集』所収の拙論「「椅子」の個人主義」を参照。

13　*Paradise Lost* の初版において、この叙事詩のもっとも重要な局面の描写が、“she eat”となっている点については、他にも読みが可能である。(1) *OED* にあるように、eat の発音が seat と脚韻を踏む形だったとしたら、Milton はここに、イブの過失の重大さをことさらに強調していたことになる。(2) Milton は、ここで“eat”という形を敢えて利用することで、読者を惑わしているのかもしれない。読者は、ここを接続法の“eat”と読み違え、次の行まで進み、seat を発音したところで、これだと脚韻を踏むので、自分が読み間違えたこと、Eve と同時に the lapse of the tongue をおかしてしまったことを悟らせようとしているのかもしれない。だとすれば、Milton はかなり「いけず」な詩人だと思う。

引用文献

Orwell, George. *The Complete Works of George Orwell*. I-XX. Ed. Peter Davison. London: Secker & Warburg, 1987-1998.

Milton, John. *Paradise Lost*. Ed. Alastair Fowler. London: Longman, 1992.

——. *Milton: Complete Shorter Poems*. Ed. John Carey. London: Longman, 1971.